

# 「読解力」向上にむけた教育力の点検・評価

大阪教育大学教授 木原 俊行

## はじめに

第2章等で提案しているように、「読解力」を伸ばす教育力として、筆者らは、4つの側面を想定している。それらは、教師の日常的な学習指導、教育環境の整備・充実、「読解力」向上を支える学校基盤のマネジメント、そして、家庭における豊かな働きかけである。前節では、それらが「読解力」、さらにそれを含む総合学力にどのように影響を与えているかについて、その関係性を論じた。また、「読解力」の育成を目指した教育力を発展させる針路についても考察した。

本節では、「読解力」の育成に資する教育力をさらに詳細に検討してみたい。例えば、「読解力」の育成に読書が効果的であることは、誰でも容易に想像できよう。しかしながら、それをどのように子どもたちに促せば、「読解力」の向上に対して効果的になるだろうか。図書を数多く与えるだけの取り組みでは、子どもの「読解力」は十分には高まるまい。まずその内容やジャンルに留意する必要があるだろう。さらにただ読ませるだけでなく、読書の感想等を伝え合う場面を設定してやれば、なおいっそう彼らの読書意欲は充実しよう。

本章では、以降、先の4側面のそれぞれについて、その成熟度を点検・評価するための視座を呈したいと考える。具体的には、いくつかの観点・項目をとりあげ、そのレベルを論じることとする。

## 1 「教師の日常的な学習指導」の点検・評価

これまで述べてきたように、筆者らは、「教師の日常的な学習指導」に対して、「各教科での多彩な情報活用の取り組み」、「問題意識や意欲の喚起」、「学び合う集団の形成」、「基本スキル指導と演習」、「適切な課題・教材の開発」、「モニタリングスキルの育成」、「読解活動へと誘う強化因子の付与」という、7つの観点を用意している。

図表6-2-1は、7つの観点到属する項目のうち、特にそのレベルに留意しなければならないものについて、「努力を要する」「おおむね満足できる」「十分満足できる」という3段階のレベルを示したものである。特に、「おおむね満足できる」と「十分満足できる」の間には、質的な違いを設定している。いくつかの項目について、詳しく解説しておこう。

図表 6-2-1 「教師の日常的な学習指導」の点検・評価(1)

観点	項目	努力を要する状況	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
Ⅲ- a 各教科での多彩な 情報活用の 取り組み	知識・語彙の 拡大	子どもが新聞や雑誌記事等 を活用して知識や語彙を豊 富にするような場面を設定 していない。	新聞や雑誌記事等を活用し なければならないような家 庭学習課題を設定して、子 どもの知識や語彙を増やそ うとしている。	新聞や雑誌記事等を活用し なければならないような課 題学習を授業に導入して、 子どもの知識や語彙を豊富 にしている。
	論拠や裏づけ 探し	子どもが自らの主張や考え を裏づけるための証拠や根 拠を探す目的で書物や文献、 資料を活用するような機会 を設定していない。	子どもが自らの主張や考え を裏づけるための証拠や根 拠を探す目的で書物や文献、 資料を活用するような学習 を導入している。	子どもに、書物や文献、資 料を活用して自らの主張や 考えを裏づけるための証拠 や根拠を明らかにさせ、そ れをレポート等にして提出 させている。
Ⅲ- b 問題意識や意欲の喚起	主体的な 読み指導	文章の内容や論旨を評価・ 吟味して批判的に読むこと の大切さを、子どもに伝え ていない。	授業等で、文章の内容や論 旨を評価・吟味して批判的 に読むこと大切さを子ど もに伝えている。	テストの問題やレポートの 課題に、文章の内容や論旨を 評価・吟味して批判的に 読むことが必要となる要素 を組み入れている。
	活動の 目的理解・意識化	文章や資料を読ませる際に、 あらかじめ、何のために読 むのか、読んでどうするの かを子どもに伝えていない。	文章や資料を読ませる際に、 あらかじめ、何のために読 むのか、読んでどうするの かを子どもに明示している。	文章や資料の読解の結果を、 あらかじめ確認した目的等 に照らして子どもに評価さ せている。
Ⅲ- c 学び合う集団の 形成	集団思考の 練り上げ	教科指導や総合的な学習に おいて、集団思考を促し、 思考を深めていく指導を行 っていない。	総合的な学習や特別活動に おいて、グループでの協働 や交流活動を計画的に行う など、集団思考を促し、思 考を深めていく指導を行っ ている。	総合的な学習や特別活動に 加えて、教科指導においても、 グループでの協働や交流活 動を計画的に行うなど、集 団思考を促し、思考を深め ていく指導を行っている。
	健全な 人間関係構築	クラスで何でも話し合える 人間関係を築かせるための 指導を行っていない。	何でも話し合える人間関係 を築かせるために、クラス での話し合いの機会を多く している。	何でも話し合える人間関係 を築かせるために、クラス での話し合いの機会を多く するとともに、その重要性 を掲示等で子どもに訴えて いる。
Ⅲ- d 基本スキル指導と演習	読解の 基本的指導	授業中のノートのとり方や 整理の仕方、ノートを活用 した予習・復習の方法を説 明していない。	授業中のノートのとり方や 整理の仕方、ノートを活用 した予習・復習の方法をあ る程度説明している。	ノートの取り方や活用方法 を説くだけでなく、実際に それを活かすような場面を 授業中に設けている。
	論理的思考の 訓練・演習	教科指導や総合的な学習に 問題解決的な活動を導入し ていない。	教科指導や総合的な学習に 問題解決的な活動を導入し ている。	教科指導や総合的な学習に 問題解決的な活動を導入し、 その過程や成果を評価させ、 課題を再構成させたり、ア プローチを改善させたりし ている。
	表現活動の指導	子どもに意見や考えを表現 させるときに、その根拠を 明らかにしたり、適切な事 例を用いたりするように助 言していない。	子どもに意見や考えを表現 させるときには、その根拠 を明らかにしたり、適切な 事例を用いたりすることの 重要性を伝えている。	子どもに意見や考えを表現 させるときには、彼らが、 その根拠を明らかにしたり、 適切な事例を用いたりでき るように、作品等のモデル を示している。
	国語科での 指導の適用	国語科でなされている「読 解指導」の内容や方法が、 他の教科指導に適用されて いない。	国語科でなされている「読解 指導」の内容や方法が、社会科・ 算数(数学)科・理科等の指導 において、応用・適用されている。	国語科でなされている「読解 指導」の内容や方法が、あら ゆる教科の指導において、 応用・適用されている。

図表6-2-1 「教師の日常的な学習指導」の点検・評価(2)

観点	項目	努力を要する状況	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
Ⅲ-e 適切な課題や教材の開発	知的好奇心・意欲の喚起	授業では、教科書以外の教材は用いていない。	授業に、子どもの知的好奇心を刺激するような、新鮮な教材を導入している。	子どもの興味・多様性に配慮し、授業に、彼らの知的好奇心を刺激するような教材を複数導入している(子どもが選択できる)。
	リアリティのある課題	話すこと、読むこと、書くことの必然性やリアリティを高めるような学習課題を用意していない。	話すこと、読むこと、書くことの必然性やリアリティを高めるような学習課題を子どもに提供している。	話すこと、読むこと、書くことの必然性やリアリティを高めるような学習課題を複数準備し、子どもに選択させている。
Ⅲ-f モニタリングスキルの育成	メタ認知力の育成	子どもに、自分の学習活動や思考の状況を内省させたり、心の動きを文章で表現させたりする機会を提供していない。	子どもに、自分の学習活動や思考の状況を内省させたり、心の動きを文章で表現させたりする機会を提供している。	子どもに、自分の学習活動や思考の状況を内省させたり、心の動きを文章で表現させたりする活動を継続させ、その変化を考察させる場面を設定している。
	ふり返りの活動	学習活動やテスト結果に関するふり返り活動を導入していない。	学習活動やテスト結果に関するふり返り活動を導入している。	学習活動を行った後やテストの見直しの際に、その時の自分の行動や考えを振り返らせたり、理由を思い返らせたりしている。
Ⅲ-g 読解活動へと誘う強化因子の付与	挑戦意欲の喚起	課題を読み解く活動の結果について、子どもにフィードバック情報を与えていない。	課題を読み解く活動の結果に対して、適切な助言や評価、賞賛等を与え、子どもに更なる挑戦意欲を喚起させる。	課題を読み解く活動の結果に対して、教師だけでなく、仲間や第三者からの助言や評価、賞賛等も与え、子どもたちに挑戦意欲をいっそう高めている。
	効用・意義の実感	日常生活や身のまわりの事象や課題を題材とする課題学習を導入していない。	日常生活や身のまわりの事象や課題を題材にして、それらの課題を解決する活動を通して、学習活動の有効性を子どもに実感させている。	日常生活や身のまわりの事象や課題を題材にし、それらの課題を解決する活動、その過程や成果を吟味する活動を通して、学習活動の有効性を子どもにいっそう実感させている。

### 1 活動の目的理解・意識化

授業中、子どもに文章を読ませる機会は数多い。けれども、何のために読むのか、読んでどうするのかを子どもに伝えていないという状態では、彼らは、読解に必要とされる方略を同定できないため、読解に失敗してしまうだろう。そもそも、それに対する意欲を持ってないだろう(努力を要する状況)。

読解に関わる活動の目的理解・意識化を大切にする教師は、読解を始める前に、きちんとその見通しを与える。写真6-2-1は、資料の読解が最終的には発表に結実するものであることを掲示によって徹底しようとしている様子である(おおむね満足できる状況)。



写真6-2-1 読解の目的理解・意識化のための掲示

さらに、ある教師たちは、読解の結果に関する振り返り活動も重視している(十分満足できる状況)。1単位時間の終末で、1単元の節目で、文章や資料等の読解の結果を、事前に確認した規準や基準に照らして子どもに自己評価させたり、子ども同士で相互評価させたりしている。それにより、子どもは、読解活動の目的を再認識しているし、その術を再確認している。

## 2 読解の基本的指導

読解の基本的指導の1つが、ノートの活用方法に関するものである。多くの教師が、子どもに、授業中のノートのとり方や整理の仕方、ノートを活用した予習・復習の方法を指導している(おおむね満足できる状況)。他の学び方も含めて、教科の学習のための手引きを作成して子どもに配布している学校も少なくない。



写真6-2-2 授業におけるノートの有効利用

さらに、ノートを、ある種の情報手段として、授業中に再活用させている教師たちも存在する(十分満足できる状況)。例えばある教師は、子どもにノートを開かせて、前時の学習内容と本時のその連続性を解説している。また、ある教師は、子どもに前時までの学習履歴をたどらせて、本時の課題解決の参考情報を得させようとしている(写真6-2-2)。いずれにしても、これらの教師は、子どもに、ノートを活用して学びを成立させ、発展させる経験を積ませて、その意義の理解、その手法の充実を図っているのである。

## 3 リアリティのある課題

学習課題の質は、子どもたちの読解に向けての意欲を変える。話すこと、読むこと、書くことの必然性やリアリティを高めるような学習課題が用意されていなければ、子どもの読解が充実しがたいのは、自明であろう(努力を要する状況)。例えば、写真6-2-3は、ある小学校6年生の児童が、総合的な学習において調査研究した街のユニバーサルデザインについて提案書を作成し、その内容や表

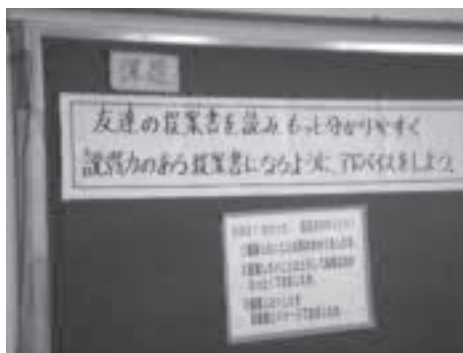


写真6-2-3 リアリティのある学習課題例

現を相互評価しようとしている場面である。彼らは、作成した提案書を実際に行政の担当課に持ち込むことになっている。だから、できばえがよければ、街のユニバーサルデザインの充実に貢献することができる。そうした文脈が、彼らの読解、特に自らのアイデアのアピールへの意欲を高めてくれるし、またその質を高めてくれる(実際に担当者から評価され、妥当性が高ければ施策に具体化されるので)。

もちろん、子どもによって「本気」になれるテーマや課題が微妙に、時には大きく、

異なる場合も想定されよう。したがって、リアリティを感じる学習課題が複数用意され、子どもがそれを選択できるようになれば、なおいっそう彼らの「読解力」は確かなものとなろう（十分満足できる状況）。

## 2 「読解力」向上に関わる「教育環境の整備・充実」の点検・評価

筆者らは、「読解力」向上に関わる「教育環境の整備・充実」には、「豊かな素材に触れる環境の整備・充実」、「『読解力』指導を支える豊かな教育カリキュラムの整備・充実」、「実社会への適用の場や機会の設定」という3つの観点を用意している。最初の「環境の整備・充実」は、後述する「『読解力』向上を支える学校基盤のマネジメント」の観点と重複するので、それ以外のもののうち、特にそのレベルに注意を払うべき項目をリストアップしてみた。それが、図表6-2-2である。2項目について、その詳細を解説しておこう。

図表6-2-2 「教育環境の整備・充実」の点検・評価

観点	項目	努力を要する状況	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
Ⅱ- b 豊かな教育カリキュラム開発・整備	各教科での基本的指導	各教科の単元指導計画において、「思考・判断」や「技能・表現」に関わる目標や評価規準を明らかにしていない。	各教科の単元指導計画において、「思考・判断」や「技能・表現」に関わる目標が明確にされている。	各教科の単元指導計画において、「思考・判断」や「技能・表現」に関わる目標が明確にされ、それらの評価規準も策定されている。
	読書活動	各教科等の「必読書」や「参考図書」などを子どもに示していない。	各教科等の「必読書」や「参考図書」などを子どもに示している。	各教科等の「必読書」や「参考図書」などを活用せざるをえない授業を実施したり、家庭学習課題を設定したりしている。
	メディア表現活動	各教科の学習指導において、コンピュータやポスター等を用いた表現活動がほとんど導入されていない。	各教科の学習指導において、子どもに、コンピュータやポスター等を用いた、多様な表現活動に従事させている。	各教科の学習指導において、子どもに、課題や目的に応じて、自らの思考やアイデアを適切に表現する方法を選択・決定させている。
Ⅱ- c 場や機会の設定	各種コンクール	各種のコンクールへの応募を促したり、学習の成果を保護者や地域社会に向けて発信するような場や機会をほとんど用意していない。	掲示等で、子どもに、各種のコンクールへの応募を促したり、学習の成果を保護者や地域社会に向けて発信するような場や機会を紹介したりしている。	掲示等により、子どもに、先輩や仲間が取り組んだコンクールや保護者・地域社会への提言を学習のモデルとして示している。
	地域への発信	子どもに、地域社会の抱える課題への解決や提言をねらいとするプロジェクト活動に取り組ませている。	子どもに、地域社会の抱える課題への解決や提言をねらいとするプロジェクト活動に取り組ませている。	子どもが取り組んだ、地域改造プロジェクト活動を専門家や地域住民に評価してもらっている。

## 1 メディア表現活動

ICT活用は、子どもたちに読解のモデルや読解のための情報源や道具を提供できるので、「読解力」の育成に資する。今日の「読解力」の育成には、なんらかの形で、ICTの活用、それを含む多様な「メディア表現活動」を位置づけたいものである（おおむね満足できる状況）。

そして、それが熟してくれば、子ども自身が必要に応じ、課題に照らして、表現手段を選択するようになる（十分満足



写真6-2-4 リアリティのある学習課題例

できる状況）。例えば、写真6-2-4は、英国の中学校の美術の授業で、生徒がフォービズムの作品制作に挑戦する際に、ある生徒は画用紙に、ある生徒はコンピュータ上で、自らのイメージを表現しようとしている様子である。同じ空間で、このような複数の表現活動が並行して展開されていても、それを誰も疑問視していなかった。

## 2 各種コンクール

「読解力」の育成だけでなく、今日、学力向上の取り組み一般に、学校外の学習機会の活用、例えば各種コンクールへの参加を重視するケースが増えている。通常学校では提供しにくい学習プログラムが準備されていたり、普段とは違った仲間との交流や競争が実現したりするからである。そして、それが、子どもたちの読解に向けた意欲の喚起や新たな発想の獲得を促進してくれるからである。



写真6-2-5 掲示等による学校外コンクールの成果報告

学力向上に熱心な学校は、そうした学習コンクール等に子どもたちを誘おうと、教室や廊下の掲示等を工夫している（おおむね満足できる状況）。また、いくつかの学校では、仲間や先輩が各種コンクールで活躍した様子、それによって獲得した賞や成績も掲示して、それらへの挑戦を一種の学校文化にまで高めている（十分満足できる状況）。

### 3 「『読解力』向上を支える学校基盤のマネジメント」の点検・評価

筆者らは、「読解力」向上を支える学校基盤のマネジメントとして、「基本方針の設定と共通理解の推進」、「教育資源・環境の有効利用」、「教育課程の整備・充実」、「推進組織・協力体制の充実」という、4つの観点を設定している。

それらに属する項目のうち、特にそのレベルを吟味しなければならないものを整理したのが、図表6-2-3である。このうち、3つのものについて、詳しく解説しておこう。

#### 1 学力観の共通認識

「読解力」の育成は、いわゆる確かな学力や社会的実践力、さらには生活・学習習慣等を含む、学びの基礎力の合成学力なのであるから、学力向上を図ろうとするならば、避けては通れぬトピックである。それゆえ、これが教職員間で話題にもならないようなことでは困る(努力を要する状況)。各学校においては、なんらかの形で、「読解力」育成のために求められる学力観について協議する機会を持ってもらいたい(おおむね満足できる状況)。

加えて、それが一般論に終始するのではなく、自校の子どもたちの実態を踏まえた、具体的な議論として展開されていることが望ましい(十分満足できる状況)。「読解力」を測定するテスト等はまだ一般には普及していないと思われるので、「読解力」に関する調査研究プロジェクトへの参加などを通じて、これを実現してもらいたい。

#### 2 ICT環境の充実・活用

前述したように、ICTの活用は、「読解力」の向上に、それを含む総合学力の向上に役立つ。国は、その整備のガイドラインを策定し、公開しているのので、それをもとにして、各学校は、自校のICT環境の整備を推進する必要がある([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/027/ronten/05051601.htm#top](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/027/ronten/05051601.htm#top))。

今日、児童・生徒がパソコン教室や図書館においてコンピュータやインターネット

を活用できるという状態にあって、然るべきであろう(おおむね満足できる状況)。そして、子どもたちの「読解力」をステップアップさせたいならば、その機会を増やすために、普通教室にコンピュータやプロジェクターを設置し、そこでインターネットを活用できる仕組みを整えるべきであろう(十分満足できる状況)。

写真6-2-6は、それを満たしている学校の数学の授業風景である。教師が、子どもたちの思考を十分に引き出すことに成功している。そして、それをICT環境が支えている。



写真6-2-6 ICT環境を活かした、指導の工夫改善

図表6-2-3 「『読解力』向上を支える学校基盤のマネジメント」の点検・評価

観点	項目	努力を要する状況	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
I-a 共通理解の推進 基本方針の設定と	学力観の共通認識	「読解力」育成のために求められる学力観について、教職員が校内で協議する機会がない。	「読解力」育成のために求められる学力観について、校内で協議する機会を持っている。	「読解力」育成のために求められる学力観について、自校の児童・生徒の実態を踏まえて、具体的に検討している。
	学級経営の共通認識	「読解力」が育ちやすい学級経営のあり方や子どもへの接し方について、教職員が共通理解を図る場がない。	「読解力」が育ちやすい学級経営のあり方や子どもへの接し方について、教職員が共通理解を図る機会が設定されている。	「読解力」が育ちやすい学級経営のあり方や子どもへの接し方を、具体的な学級の事例をもとに、教職員が検討している。
I-b 有効利用(Ⅱ-aと共通) 教育資源や教育環境の	ICT環境の充実・活用	コンピュータの台数が不足していたり、インターネットの利用環境が整っていなかったりする。	児童・生徒がパソコン教室や図書館においてコンピュータやインターネットを活用できる。	児童・生徒がパソコン教室や図書館においてコンピュータやインターネットを活用できる上に、普通教室においてもそれらを教師等が利用できる。
	校内の言語環境の整備	話す・聞く際のルールを学校として定めていない。	話す・聞くルールを学校として定め、それらを教師が教室や廊下に掲示している。	話す・聞くルールを学校として定め、それらを児童・生徒自身が教室や廊下に掲示している。
I-c 教育課程の整備・充実	全体計画の策定	各教科等の年間指導計画に「読解力」の育成に関する視点が欠如している。	各教科等の年間指導計画に「読解力」の育成に関する視点が設けられている。	各教科等のものだけでなく、合科等によって「読解力」の育成を充実する計画も策定されている。
	各種学習指導法の導入	朝読書やNIE活動を実施してはいるが、その運用に工夫がみあたらない。	朝読書やNIE活動を実施し、図書や新聞の内容を要約・紹介する活動に、児童・生徒を従事させている。	朝読書やNIE活動を実施し、図書や新聞の内容を要約・紹介する活動に、児童・生徒を従事させ、その成果を掲示等により、共有させている。
		児童・生徒が多様なメディアを用いて自分の作品や考えを表現する活動を授業に導入することの重要性が共通理解されていない。	児童・生徒が多様なメディアを用いて自分の作品や考えを表現する活動を授業に導入することの重要性が共通理解されている。	児童・生徒が多様なメディアを用いて自分の作品や考えを表現する活動を授業に導入することの重要性が共通理解され、その手法や事例が教員間で共有されている。
		職場体験など、実社会に触れさせる体験的学習が実施されていない。	職場体験など、実社会に触れさせる体験的学習が実施されている。	職場体験など、実社会に触れさせる体験的学習が実施され、その意義や可能性を上級生が下級生に伝承する仕組みがある。
I-d 充実 推進組織・協体制の	研修・授業研究の機会	校内研修のテーマや課題に「読解力」の育成という視点がみあたらない。	校内研修のテーマや課題に「読解力」の育成という視点が設けられている。	校内研修のテーマや課題に「読解力」の育成という視点が設けられており、それを具体化するための授業研究が実施されている。
	教師の資質向上	教師自身が読書や研究的論文の執筆に動んでいない。	教師自身が読書や研究的論文の執筆に着手している。	教師自身が読書や研究的論文の執筆に着手し、その過程や成果を保護者や地域住民、他校の教師などに公開している。



### 3 研修・授業研究の機会

繰り返すが、「読解力」の向上は、今日の学力向上の要となっていることが少なくないので、校内研修のテーマや課題にそれに関係した視点が設けられていることが望まれる(おおむね満足できる状況)。

加えて、その意義を実感したり、その方法について具体的に考えたりするためには、やはりそれをターゲットにした授業を公開して事例研究を繰り返す、「授業研究」が必要になる(十分満足できる状況)。

また、公開された授業を題材とする協議会では、「読解力」育成の方法論の多様性に配慮して、写真6-2-7のように、参加型のものが企画・運営されることが期待されよう。なお、こうした授業研究の新しい方法論については、拙著『教師が磨き合う学校研究』(ぎょうせい、2006年)をご参照いただきたい。



写真6-2-7 参加型の授業研究会

## 4 「家庭における豊かな働きかけ」の点検・評価

家庭における豊かな働きかけには、「しつけ」、「家庭での交流・支援」、「学びへの参画」という3観点を用意している。それらに属する項目のうち、そのレベルに特に留意すべきものを整理したのが、図表6-2-4である。若干の項目について、説明しておこう。

### 1 基本的な生活習慣形成

確かに、テレビを見放題、ゲームをやり放題という生活が続くと、子どもたちは、落ち着いて物事を考えたり、それを表現したりすることを避けるようになりがちである。だから、保護者は、子どもたちがテレビを見る時間やゲームをする時間を(ある程度)制限すべきであろう(おおむね満足できる状況)。

けれども、彼らにとってそれが「強制」に過ぎないのであれば、制限の効果は十分に期待できないであろう。保護者と子どもがそうした制限の理由について対話する、その具体策について相談する過程を経て、つまり、子どもがテレビを見る時間、ゲームをする時間の制限について納得する形で、そのようなルールを導入することが望まれよう(十分満足できる状況)。

なお、テレビにせよ、ゲームにせよ、視聴・活動時間だけでなく、そのジャンルや内容についても、保護者は検討すべきである。子どもたちの知的好奇心をかき立てるテレビ番組も少なくないし、楽しみながら学習できるゲームソフトも増えているからである。

図表6-2-4 家庭における豊かな働きかけの点検・評価

観点	項目	努力を要する状況	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
しつけ	基本的な生活習慣形成	テレビを見る時間やゲームをする時間を制限していない。	テレビを見る時間やゲームをする時間を制限している。	子どもがテレビを見る時間やゲームをする時間を、彼らと相談しながら、彼らが納得する形で決定している。
	学習の構えの形成	難しい問題に遭遇した場合の態度について話し合いをしたことがない。	難しい問題でも、投げ出さないうでじっくり考えるように言っている。	難しい問題でも、投げ出さないうでじっくり考えることがなぜ大切なのかを子どもに説いている。
		本や事典類にふれさせるように努力していない。	本や事典類にふれることの意義を子どもに伝えている。	本や事典類にふれることの意義を子どもに伝えるとともに、それをやりやすい環境を作っている。
家庭での交流・支援	自主性の尊重	子どもに、彼らのよいところを認めて自信を持たせるように接していない。	子どもに、彼らのよいところを認めて自信を持たせるように接している。	子ども自身が気づいていない、彼らのよいところを発見し、それを認めて自信を持たせるようにしている。
	豊かな体験活動	子どもと本の種類や内容について話し合う機会を作っていない。 子どもとの会話では、美術館や博物館等のことが話題にならない。	子どもと本の種類や内容について話し合う機会を設けている。 子どもとの会話において、美術館や博物館等のことを話題にしている。	子どもといっしょに本を読んだり、読んだ本の感想を話し合ったりしている。 子どもといっしょに、美術館や博物館に出かけている。
学びへの参画	学校への関心	学級・学年通信や学校通信をほとんど読まない。	学級・学年通信を読んでいる。	学級・学年通信だけでなく、学校通信も読んでいる。
	保護者の学び	特に、学習や習い事をしていないわけではない。	資格を取るために、学習や習い事をしている。	資格を取るためだけでなく、教養を高めるために、また自己実現の術として、学習や習い事をしている。

## 2 学校への関心

学校が保護者に対して様々な情報を提供する機会が増えている。学校からの通信にも、いくつかの種類があろう。少なくとも、我が子が属している学級・学年のものはしっかり読んで、学校における学習や生活の状態を把握してもらいたい(おおむね満足できる状況)。

さらに、学校単位で作成されている通信についても、保護者は、できれば目を通すことが望ましい(十分満足できる状況)。学校長の学校経営ポリシーがそこで披露されるに違いないし、「読解力」の育成についてであれば、例えば学校における指導の重点や学校外学習機会などが紹介されるからである。

なお、保護者の学校への関心を高めるために、教師たちにも工夫が必要である。例えば、ある中学校では、学校長が学校便りをメールマガジンにして、保護者の携帯電話に配信している。保護者の生活にマッチした、効果的な情報伝達であると思う。もちろん、紙の通信にも、味わいはあるのだが――。

## おわりに

本節では、教師の日常的な学習指導、「読解力」向上に関わる教育環境の整備・充実、「読解力」向上を支える学校基盤のマネジメント、そして、家庭における豊かな働きかけのレベルを論じてきた。特に、いくつかの項目については、それがどこまで熟しているかを点検するための指標を準備してみた。

各学校では、前節で述べた、「読解力」の向上を目指した教育力の発展モデルに、この指標を重ねて、自校の子どもたちの「読解力」を高めるために、今、何をすべきかを明らかにしてもらいたい。つまり、それらを用いて、「読解力」を高めるための「我が校ならではのアプローチ」を見いだしてもらいたい。